

本日は降臨節前主日、教会の暦では一年最後の日曜日になります。来週からは降臨節となり、私たちはクリスマスを迎える準備の季節に入っていきますと共に、新しい一年のスタートを切るのです。さて本日は教会の一年の最後に当たりまして、教会の使命に与えられている使命について考えてみたいと思います。

ルカによる福音書、第十九章一節から十節に、ザアカイの話が書かれております。

イエスはエリコに入り、町を通っておられた。そこにザアカイという人がいた。この人は徴税人の頭で、金持ちであった。イエスがどんな人か見ようとしたが、背が低かったので、群衆に遮られて見るができなかった。それで、イエスを見るために、走って先回りし、いちじく桑の木に登った。そこを通り過ぎようとしておられたからである。イエスはその場所に来ると、上を見上げて言われた。「ザアカイ、急いで降りて来なさい。今日は、ぜひあなたの家に泊まりたい。」ザアカイは急いで降りて来て、喜んでイエスを迎えた。これを見た人たちは皆つぶやいた。「あの人は罪深い男のところに行って宿をとった。」しかし、ザアカイは立ち上がり、主に言った。「主よ、わたしは財産の半分を貧しい人々に施します。また、だれかから何かだまし取っていたら、それを四倍にして返します。」イエスは言われた。「今日、救いがこの家を訪れた。この人もアブラハムの子なのだから。人の子は、失われたものを捜して救うために来たのである。」

ザアカイは『徴税人の頭』と呼ばれておりますが、徴税人は当時人々に大変嫌われている存在でありました。主イエスがこの世におられたころ、ローマ帝国は全盛時代を迎えており、聖書の舞台もまたローマ帝国によって支配されておりました。ローマ帝国は税を取り立てる役割を現地の人々にさせておりましたが、税に苦しむ人々から見れば、徴税人達は、自分達の同胞でありながら魂をローマに売った存在に他なりません。一方徴税人達も自分達の役割を利用して私腹を肥やし、悪いことを重ねるようになってしまったのでした。人々が徴税人を嫌っていたのはかなり根の深い深刻な問題であったのです。もはや人間の力では一般の人々と和解することは不可能であったのでした。

ザアカイは背が低かったので、主イエスが来られたときに見ることが出来ず、いちじく桑の木に登って見ようとしてしました。そのザアカイご覧になった主イエスは「ザアカイ、急いで降りて来なさい。今日は、ぜひあなたの家に泊まりたい」と招きの言葉をかけられたのでした。これを見た人たちは皆つぶやきました。「あの人は罪深い男のところに行って宿をとった」。これは驚くべきことです。人間的には誰とも和解することの出来ないザアカイを主イエスが目をとめられ、招きの言葉をかけられたのです。主イエスの招きはこの世的な判断に関わらず与えられるものであるのを知られます。ということは、私たちの判断で主イエスの招きを図ることは出来ないということです。

主イエスがこの世におられ、人々に天国を宣べ伝えておられたとき、主は十二弟子のほかに七十二人を任命し、御自分が行くつもりすべての町や村に二人ずつ先に遣わされたことがありました。七十二人はそれぞれ主イエスご自身を伝えるため出かけていきました。こうして蒔かれた福音の種はあちこちで芽を出し、増え広がっていきました。それぞれ主イエスがご自分で行くつもり町や村だったのでした。それはやがて世界中に増え広がり、この地にも蒔かれ、私たちの信仰の先輩達を通して私たちも受け継いでおります。これは主はこの地にもご自分が来る

つもりでおられたのに他なりません。主は確かにこの地の伝道を決意され、私たちの信仰の先輩達を通して、そして私たちを通してその業をなさろうとされているのです。主は確かにこの地の人々を招いておられるのです。

人々の批判をよそに、主イエスはザアカイの家の客となりました。人々はそれを見てつぶやきました。人々から見て、ザアカイの家に起こっていることは非常識以外の何物でもありませんでした。しかし家の中ではこれも人間の力や心では到底達成することの出来ない、奇跡とも言うべきことが起こっていたのでした。ザアカイは言いました。「主よ、わたしは財産の半分を貧しい人々に施します。また、だれかから何かだまし取っていたら、それを四倍にして返します」。ザアカイは金持ちでした。最初は人々から嫌われているのを気にしていても、いつしかそれに慣れ、自分の私利私欲を満たすことに何の抵抗も感じない人間にザアカイはなってしまっていたのでした。そのような人がどうしてこのような決心をすることが出来たのでしょうか。疑いもなく主イエスとザアカイとの出会いが、この美しい奇跡をもたらしたのでした。

さきほどの「ザアカイ、急いで降りて来なさい。今日は、ぜひあなたの家に泊まりたい」という言葉に戻ってみましょう。主イエスは何故かザアカイの家にお泊まりになることを望んでおられるかのようです。ところでこの箇所原語の意味を調べてみますと、「ザアカイ、急いで降りて来なさい。今日は、あなたの家に泊まらなければならない」という風になっております。主イエスはたまたまザアカイの家の客になったのではなく、たまたまザアカイの回心の場面に居合わせたのでもなく、ザアカイのすべてを御存知であり、主なる神がザアカイを愛しておられることを告げなければならなかったのです。「人の子は、失われたものを捜して救うために来たのである」。この捜すという主なる神の決断は、たまたま出会った人を救うとか、ご自分の心にかなう人だけを救うというのではなく、すべての人を愛され、主イエス御自身が捜され、救われる、捜さなければならない、救わなければならない、導かねばならない、主なる神のなさった伝道の決断は、このように大変緊張感に満ちた、救わずにはいられないという主なる神の御心が満ちたことであるのに気づかされます。「この人もアブラハムの子なのだから。」主なる神によって最初に義とされたアブラハム、アブラハムの子とは、主なる神によって愛されている存在であることの証です。

聖ルカはこのように、主イエスは人間的には救われる道が見い出せない人、私たちから見てあきらめるしかないと思うような人をも、主なる神は愛され、救われるのであること、人間では決して救うことが出来ないと思う人でも、主イエスは救いを告げ知らせ、主なる神の愛をその人が受け入れられる方法でお与えになるのだということを私たちに語っています。

主イエスによってザアカイと同じように回心し、迫害するものから使徒となった聖パウロは、ローマの信徒への手紙の中でこう記しております。「信じたことのない方を、どうして呼び求められよう。聞いたことのない方を、どうして信じられよう。また、宣べ伝える人がなければ、どうして聞くことができよう」。主は私たちにこの使命を与えておられるのです。人々が信じるため、よき訪れを聞くため、私たちはまだキリストに触れたことのない人々に宣べ伝えるため召されているのです。

聖書の中で主イエスの伝道の姿を学ぶとき、私たちは意外な事実気づかされます。それは主が一度として、人々を説得したり説き伏せたり、その人の自由意志に反して宣べ伝えたことはなかったということです。神の国を指し示されはしましたが説明なさらなかったのです。これは真理を語るうえで大変重要なことではないでしょうか。主がその人の自由意志を最後まで大切になさり、しかも愛しておられたように、私たちもまた主イエスを指し示しながら、その存在を、力の大きさを、愛の深さを自分自身が十分に感じていきたいものです。